

1

HIV 陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に資する研究

研究代表者

白阪 琢磨 (国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター エイズ先端医療研究部長)

研究分担者

大山 泰宏 (京都大学教育学研究科 研究員)

安尾 利彦 (国立病院機構大阪医療センター臨床心理室 主任心理療士)

村井 俊哉 (京都大学精神医学 教授)

池田 学 (大阪大学大学院医学系研究科精神医学 教授)

山田 富秋 (松山大学人文学部社会学科 教授)

研究要旨

治療の進歩で予後が大きく改善し慢性疾患と位置づけられるまでになった HIV 感染症であるが、治癒はないため HIV 感染者の HIV 感染の状況には変わり無く、生きづらさや精神心理的困難を抱えていることが少なくないと言っても過言ではなく、精神的・心理的課題が指摘されている。本研究は昨年度まで「HIV 感染症および合併症の課題を克服する研究」班の研究分担として実施して来たが、研究課題の重要性と専門性が高いため、本年度より独立した研究班と位置づけられた。本研究では、先行研究成果を踏まえ、HIV 陽性者の精神・心理的実態を明らかにし、より効果的な精神・心理的支援を開発し、心理的支援を統合した診療ネットワークモデルの提供を試みた。研究は、研究 1「カウンセリング等心理支援の評価」、研究 2「HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討」、研究 3「MRI 画像による HIV 神経認知障害の神経基盤の解明」、研究 4「HIV 陽性者の精神疾患医療体制と連携体制の構築」、研究 5「薬害被害者の心理的支援方法の検討」の 5 つの分担研究を実施した。

研究目的

治療で予後が改善した HIV 感染症であるが、精神的・心理的課題が指摘されている。本研究では HIV 陽性者の精神・心理的実態を明らかにし、より効果的な精神・心理的支援を開発し、心理的支援を統合した診療ネットワークモデルの提供を試みる。

研究 1 (大山) HIV 陽性者へのカウンセリングの効果を実証的に示す。また、陽性者の心理的課題を特定し、それにふさわしいカウンセリングの方法や技法を検討する。

研究 2 (安尾) HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題、中でも受診中断について、その心理的背景を明らかにする。

研究 3 (村井) HIV 感染者の心理的ストレスの背景にある HIV 関連神経認知障害 (HAND) の神経基盤について、MRI 画像統計解析により明らかにする。

研究 4 (池田) 体制を、大学院精神科、単科精神科病院、公立精神科病院、精神科診療所の連携により構築する。連携を実現するための精神科医療の専門職向けの教育資料を開発する。

研究 5 (山田) 血液製剤由来 HIV 陽性者にとって有益な心理的支援方法を、心理学、社会学、ピア (当事者)、医療者の様々な視点から検討する。

研究方法

研究 1 (大山) 研究協力の申し出のあった HIV 陽性者に、臨床心理士による支持的技法の標準的なカウンセリングを行い、その前後および中間地点において、質問紙や投映法などの複数の心理検査を通して評価する。

研究 2 (安尾) ①大阪医療センターの HIV 陽性者 168 名を対象に、診療録から基本属性、受診中断歴、受診無断キャンセル数等を抽出する。②同施設の HIV 陽性者を対象に、受診中断等行動面の障害を伴う問題の有無の調査、心理尺度を用いた量的調査を実施し、さらに他の慢性疾患 (糖尿病・高血圧症) の患者各 200 名に同様の調査を実施し、比較を行う。

研究 3 (村井) 大阪医療センターで取得済みの疾患群対照群各約 40 名、合計約 80 名のデータを用い、患者群と対象群の脳灰白質体積、白質繊維の障害の比較を行う。これら脳構造異常と認知機能検査や血液データ等臨床所見 (感染状態) との相関等について画像統計解析を行う。

研究 4 (池田) 平成 30 年度は、大阪府、大阪精神科病院協会、大阪精神科診療所協会などの協力得て、大阪府下の全精神科医療機関に対して、直近半年間の HIV 関連精神疾患の診療実績、診療上の留意点、紹介元、紹介先などを郵送によるアンケート調査を実施した。

研究 5 (山田) 薬害被害者とその医療従事者を対象にライフストーリーを中心としたインタビュー調査を行

う。とくに患者については以下の作業を行う。これまで実施したインタビューの語りをより深く理解するために、いわゆる「薬害エイズ事件」という歴史的・社会的文脈の視点も組み入れて、再整理を行う。この作業を通して、HIV チーム医療の医療従事者における語りの「文脈」ならびに「意味」も明確にすることができる。そして、これらによって、患者と医療従事者双方にとって、より良い心理的支援方法の像を映し出す。

研究結果

研究1 (大山) 3事例が終了し、うち2事例において詳細な分析が完了し、抑うつや不安気分の著しい改善を認めた。3事例目においては、心理アセスメントの分析の途中であるが、社会生活面での改善を認めた。

研究2 (安尾) 約20%に受診中断歴があった。受診中断歴の有無による2群化で、年齢、治療歴の有無、無断キャンセル数に有意差を認めた。メンタルヘルスや物質使用に関する記述の有無では差を認めなかった。

研究3 (村井) 中間解析の結果、白質繊維について対照群と比較して患者群の拡散異方性の違いは認められなかったが、脳梁や内包前脚等の脳部位で平均拡散能や放射拡散係数が有意に増加していた。運動機能や知覚統合と脳梁などの脳部位の平均拡散能との間に負の相関を認めた。

研究4 (池田) 予備調査票の送付準備が整い、本調査票も完成した。大阪大学医学部倫理委員会での審査の手続き中である。

研究5 (山田) 今年度は、歴史的出来事に沿って患者の語りを整理することで、インプリケーションが得られた。また、ブロック拠点病院のチーム医療について、研究成果をまとめることができた。

考察

研究1 (大山) カウンセリングによる支援が、HIV 陽性者の精神的健康を高め、社会生活への参加を改善することが示唆された。

研究2 (安尾) ①受診の無断キャンセルが多い陽性者は、受診中断する可能性も高いことが推察された。無断キャンセル後の来院時に無断キャンセルに至った要因を検討し、受診の障壁への介入が重要と考えた。メンタルヘルスや物質使用については問題の自覚や自発的発言が容易でないため、医療者による意識的なアセスメントが求められる。②研究実施に向け手続きを進める。

研究3 (村井) HIV 患者群の白質神経繊維では、放射拡散係数の増加を認めることから、髄鞘の変性が生じていることも考えられる。

研究4 (池田) 連携システムの中核と考えられていた国立病院機構大阪医療センター精神科部長の急病により、一時的に診療体制を大きく縮小せざるを得なくなり研究の進捗が半年遅れたが、12月から急速に遅れを

取り戻しつつある。

研究5 (山田) 薬害被害者の心理的支援方法について、これまでのインタビュー内容を歴史的出来事に沿って位置づけると、HIV/エイズが社会的に大きなステイグマとみなされた時期の前後において、患者自身のHIV感染に対する意識も、医療機関の対応も大きく異なっていることがわかった。和解後に整備されたHIVチーム医療の評価については、あるブロック拠点病院のチーム医療における心理的支援方法について、詳細に明らかにすることができた。それはカウンセリングを特別なものではなく、日常の医療活動の中に自然に位置づける——カウンセリングの敷居を下げて使ってもらいやすいようにするなど——試みであった。

自己評価

研究1 (大山) 1) 達成度について：事例数がまだ少なく、この点では当初計画より遅れがあるが、成果は十分に示している。2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：これまで、HIV 陽性者に対するカウンセリングの効果を、心理アセスメントにより実証的に示した研究は存在せず、学術的意義・社会的意義が大きい。3) 今後の展望について：事例数を増やしていくことにより、さらに結果に信頼性が増すことと思われる。京都市立病院において研究を実施できる目処がたってきたので、今後の進展が期待できる。

研究2 (安尾) 1) 達成度について：①予定通り達成された。②現在再申請の手続き中で今年度中に開始する予定であり、次年度中に分析まで完了する予定である。2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：受診中断の要因については、国内外における先行研究でも年齢や治療歴等は指摘されていたが、本研究では無断キャンセルとの関連性が明らかとなり、この点は各医療機関において具体的に介入を展開する上で示唆に富むものとする。3) 今後の展望について：研究1および2の結果を踏まえ、平成31年度には受診中断に至る心理的力動を明らかにするための調査研究のプロトコルを検討し、平成31-32年度に実施・分析する。

研究3 (村井) 1) 達成度について：順調に解析継続中。今後も継続し、結果を確定させる予定。2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：HANDの生物学的基盤・病態について、MRI画像を用いることにより、認知機能検査と採血のみでの評価よりも正確かつ詳細に検討することができ、陽性者の心理的ストレスの背景、心理的支援にあたって考慮すべき基盤となる情報を提示できると考える。3) 今後の展望について：画像統計解析を継続し、灰白質、白質の解析結果から得られた所見を統合し、HANDの神経基盤を明らかにする。

研究4 (池田) 1) 達成度について：研究が半年遅れていたが、来年度の診療体制の目処が立ち、2019年1月に大阪府下の精神科医療機関に予備調査の送付、本

調査の大阪大学医学部倫理委員会への提出ができた。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：治療の進歩によって予後が大きく変わりつつある HIV 陽性者の精神疾患、すなわち HIV 脳症由来のうつ病、アパシー、認知症、さらには 2 次障害とも言える HIV 陽性が判明したことによる反応性の抑うつ状態や適応障害（以下、HIV 関連精神疾患）の診療体制を構築するためのモデルができれば、国際的にも社会的意義は極めて大きい。3) 今後の展望について：平成 31 年度以降は、アンケートにより診療実績の多かった機関を直接訪問し、診療連携構築への協力を依頼する。さらに、アンケート並びに訪問によって明らかになった課題の解説や協力機関のリストを盛り込んだ専門職向けの冊子の作成を目指す。

研究 5（山田） 1) 達成度について：薬害被害者の心理的支援方法について、これまで蓄積したデータを分析し、一定の知見を得ることができたので、初年度の課題は達成できた。2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：ここで得られた研究成果は学術的にはライフストーリー研究の進展に寄与し、国際的・社会的には、薬害被害者の心理的支援方法について、具体的な方法を示唆することができる。3) 今後の展望について：さらにインタビュー対象者を広げることで、今年度の研究成果を検証することができ、チーム医療について具体的な支援方法を他の医療機関に伝えることができる。

結論

研究 1（大山） HIV 陽性者への支援の方法として心理カウンセリングが有効であり、精神的健康や社会参加を改善することが見いだされた。

研究 2（安尾） 受診中断を予防するため、受診の無断キャンセル発生時に介入の必要性が明らかとなった。今後、介入方法について検討する必要がある。

研究 3（村井） 良好な結果が得られつつある。解析を継続し、結果をまとめる。

研究 4（池田） アンケートの結果によって、HIV 関連精神疾患の診療連携の施設に該当する精神科医療機関に対し、診療拠点となる承諾を得る必要がある。

研究 5（山田） 患者と医療従事者を対象にした薬害被害者の心理的支援方法について、それぞれが置かれた具体的な状況に即した効果的支援方法を提示できる礎を提供できた。

知的所有権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

研究発表

研究代表者

白阪琢磨

- Watanabe D, Uehira T, Suzuki S, Matsumoto E, Ueji T, Hirota K, Minami R, Takahama S, Hayashi K, Sawamura M, Yamamoto M, Shirasaka T : Clinical characteristics of HIV-1-infected patients with high levels of plasma interferon- γ : a multicenter observational study. 「BMC Infect Dis.」 19(1):11、2019 Jan 5
- Tanaka S, Kishi T, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E : Outbreak of hepatitis A linked to European outbreaks among men who have sex with men in Osaka, Japan, from March to July 2018. 「Hepatology Research」 Epub ahead of print 2019 Jan 17
- 白阪琢磨：Hand in Hand～ HIV 治療と精神科の連携～ No.20 『急がれるエイズ治療拠点病院と地域の精神科との連携』 「コリウス」 Vol.20、2018 年 4 月 20 日
- 白阪琢磨：逆転写酵素阻害薬 HIV-1 reverse transcriptase inhibitors 「医学のあゆみ」 265(7) P.557-561、2018 年 5 月 19 日発行
- 白阪琢磨：ガイドライン改訂の Points 『DHHS ガイドライン改訂のポイント』 「HIV 感染症と AIDS の治療 2018 年 5 月号」 9(1) P.11-19、2018 年 5 月
- 白阪琢磨：topics 「エイズ診療」 について 「皮膚病診療 2018 年 10 月号」 40(10)P.974-982、株式会社協和企画、2018 年 10 月
- 白阪琢磨：HIV 感染防ぐのにゲノム編集は必要？ 専門家に聞く 「朝日新聞デジタル」、2018 年 12 月 7 日
- 白阪琢磨：HIV 治療薬『より相互作用の少ない薬剤開発を』 「日刊薬業 (web/ 紙面)」、2018 年 12 月 7 日
- Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Tomishima K, Nishida Y, Yoshino M, Yamazaki K, Uehira T, Shirasaka T: Association of tenofovir level and discontinuation due to impaired renal function. HIV Drug Therapy Glasgow 2018, Glasgow, 2018 年 10 月 29 日
- 白阪琢磨：Hemodialysis of people with HIV infection. 第 63 回日本透析医学会学術集会・総会、神戸、2018 年 6 月 29 日
- 白阪琢磨：HIV 感染症の診断と治療－ HIV 感染症の治療は可能か？。日本臨床検査自動化学会第 50 回大会、神戸、2018 年 10 月 13 日
- 白阪琢磨：てんかんと服薬アドヒアランス 他領域に学ぶ服薬アドヒアランス 「HIV 患者における現状と問題点。第 52 回日本てんかん学会学術集会、横浜、2018 年 10 月 27 日
- 東 政美、中濱智子、下司有加、武部美紀、伊藤文代、白阪琢磨：生活習慣病を併発している HIV 陽性者の生活習慣の改善に対する意識変化。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 2 日

- 水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理的背景に関する研究。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 2 日
- 加藤賢嗣、吉原雄二郎、渡邊 大、福本真司、和田恵子、安尾利彦、白阪琢磨、村井俊哉：HIV 関連神経認知障害 (HAND) と脳構造。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 3 日
- 来住知美、渡邊 大、北島平太、寺前晃介、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、下司有加、松岡恭子、東 政美、中濱智子、上平朝子、白阪琢磨：自発検査で判明した新規 HIV 感染者の受検動機。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 3 日
- 上平朝子、渡邊 大、矢倉裕輝、富島公介、中内崇夫、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、白阪琢磨：当院の 2 剤レジメンの現状。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 3 日
- 矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、上平朝子、白阪琢磨：新規抗痙攣薬に変更を行うことで抗 HIV 薬との相互作用が回避できた 1 例。第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018 年 12 月 3 日
- 中内崇夫、矢倉裕輝、富島公介、上平朝子、白阪琢磨、山崎邦夫：当院における抗 HIV 療法施行患者のポリファーマシーに関する検討。第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018 年 12 月 4 日
- 白阪琢磨：明日へのことば「エイズ治療最前線の 30 年」。NHK 関西発ラジオ深夜便、NHK ラジオ第 1、2018 年 6 月 9 日 (2017 年 11 月 11 日再放送)

研究分担者

大山泰宏

- 田中史子、山本喜晴、荒木浩子、市原有希子、清水亜紀子、高橋紗也子、仲倉高広、野田実希、古野裕子、山崎基嗣、大山泰宏：HIV 陽性者への心理的支援に関する検討— HIV 陽性者との 25 回の面接経過を通して—、日本心理臨床学会第 37 回大会、2018 年 8 月、神戸国際会議場
- 山本喜晴、田中史子、荒木浩子、市原有希子、井上洋士、大澤尚也、清水亜紀子、高橋紗也子、仲倉高広、野田実希、古野裕子、山崎基嗣、大山泰宏：HIV 陽性者に対するカウンセリング効果の実証的研究—薬物依存症男性の事例を通して—、第 32 回日本エイズ学会学術集会、2018 年 12 月、大阪国際会議場

安尾利彦

- 安尾利彦：長期療養におけるコミュニケーションの重要性。HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師認定講習会、第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月、大阪
- 水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理的背景に関する研究。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月、大阪

村井俊哉

- HIV 関連神経認知障害 (HAND) と脳構造。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月 3 日、大阪

池田 学

- Tsunoda N, Hashimoto M, Ishikawa T, Fukuhara R, Yuki S, Tanaka H, Hatada Y, Miyagawa Y, Ikeda M. Clinical features of auditory hallucinations in patients with DLB: A soundtrack of visual hallucinations. *J Clin Psychiatry* (in press) 2018 May 8;79(3). pii: 17m11623. doi: 10.4088/JCP.17m11623. [Epub ahead of print]
- Morita K, Miura K, Fujimoto M, Shishido E, Shiino T, Takahashi J, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Hirano Y, Koshiyama D, Okada N, Ikeda M, Onitsuka T, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R. Abnormalities of eye movement are associated with work hours in schizophrenia. *Schizophr Res*. 2018 Jul 12. pii: S0920-9964(18)30408-0. doi: 10.1016/j.schres.2018.06.064. [Epub ahead of print]
- Hata M, Kurimoto R, Kazui H, Ishii R, Canuet L, Aoki Y, Ikeda S, Azuma S, Suehiro T, Sato S, Suzuki Y, Kanemoto H, Yoshiyama K, Iwase M, Ikeda M. Alpha event-related synchronization after eye closing differs in Alzheimer's disease and dementia with Lewy bodies: a magnetoencephalography study. *Psychogeriatrics*. 18 : 202-208, 2018
- Ikeda M, Disease overview of early onset dementia and long-term care model, International Conference on Dementia Care and Dementia Friendly Community, Kaohsiung, Taiwan, August 17, 2018
- Ikeda M, Challenges for dementia-friendly society -living well with dementia -UCL-Japan Youth Challenge Symposium "Aging Society- Our life in ageing society- how young generation contributes to various problem associated with ageing", London, UK, August 3, 2018
- 池田 学、認知症診療—リスクファクターから考える「認知症診療におけるリスクファクターの重要性」。第 114 回日本精神神経学会、2018 年 6 月 21 日 -23 日、神戸

山田富秋

- 山田富秋：血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討—ある HIV チーム医療の実際から—：松山大学論集：第 30 巻第 4-1 号：213-241 頁：発表年 2018 年 10 月
- 山田富秋、橋本謙：表題 薬害被害者の心理的支援方法の検討。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月、大阪